

# にちぎん

2019 NO.60

冬



インタビュー 扉を開く

**三澤彩奈** 中央葡萄酒株式会社 取締役・栽培醸造部長

女性醸造家の熱い思いが生んだ世界に羽ばたく山梨・勝沼のワイン

地域の底力

**岐阜県美濃市**

地域の伝統を守り未来を見据える「うだつの上がるまち」岐阜県美濃市

対談 守・破・創

**千家和比古** 出雲大社権宮司

**布野幸利** 日本銀行政策委員会 審議委員

古代の神々が現代に息づく「出雲大社」の悠久なる信仰

エッセイ “おかね” を語る

**角田光代** 作家 スマートにできない

どうしても慣れない習慣のひとつに、チップというものがある。サービスを受けたときに払うお金のことであるが、日常的にこれが習慣である国や地域と、そうでないところがある。私が生まれて育って暮らしている日本では、基本的にはない。だから、チップについては感覚的にとらえがたいところがある。

チップの習慣がある国を旅する際にガイドブックを読むと、いつ、どんな場で、いくらくらいのチップを払うべきかが書いてある。はつきりいくらと書いてあると、ほっとする。私にとって難しいのは飲食店だ。会計の際レシートを確認してサービス料が含まれていたらチップは不要、とか、合計金額の二五%を支払うべし、とか、こまかい文字のレシートをチェックするのも面倒なら、合計金額の二五%を割り出すのも、数字の苦手な私には一苦労だ。

もつとも難易度が高いのは「心地よいサービスを受けたらそれに見合ったチップを払えばよい、そうでないならチップは不要」というアドバイスだ。旅先の、はじめて訪れた町の、はじめて訪れた店の対応の、良し悪しがわからない。しかもそれに「見合った」額などと言われると、なんだかおろおろしてしまう。

チップを支払う際もスマートに振る舞えない。コインなり紙幣なりをさっと出そうと思いつつ、入れておいたところになかったり、財布を出し



絵・江口修平

## スマートにできない

角田光代

てこまかい金額がないと気づいたりして、「あっ、いや、ちょっと、あの」などとしどろもどろになったこともある。そうしてやっぱり、コインであろうと少額であろうと、何にも包まれていないお金を見知らぬ人に手渡すことに、ちょっとした抵抗がある。渡さないほうが見苦しい場合もあると頭ではわかっていながら、この抵抗はなかなか拭えない。

少し前に、仕事で上海を訪れたのだが、みごとなキャッシュレス化に驚いた。みんなスマートフォンにアプリを入れて、レストランでメニューを見るにも注文をするのも支払いをするのもそれを使っていく。タクシーを呼ぶのもアプリだし、電車の予約などもアプリだという。私も、コーヒーショップに入ってふつうに注文したところ、「アプリがないとうちでは注文できないんです」とお店の男の子に言われてびっくりした。アプリを持たない私は現金の使えるお店しかいけなかったのだが、ふと、チップってどうなっているんだろうなあ、と思った。クレジットカード払いと同じように、そのアプリにはチップ欄があるのだろうか。もし、チップ専用のアプリがあって、いくら払うかの判断も計算も、ぜんぶやってくれ、自動的に払ってくれるのだったら、もしや私にはたいへんありがたいのかもしれない、などと考え、その前に、電子マネーやアプリ関係に詳しくならなければならぬことに気づいた。



かくた・みつよ●作家。1967年生まれ。1990年『幸福な遊戯』でデビュー。主な著書に『対岸の彼女』『八日目の蟬』など。近著にエッセイ集『いきたくないのに出かけていく』など。

撮影：垂見健吾



- 2 エッセイ／“おかね”を語る  
スマートにできない 作家 角田光代

- 4 インタビュー／扉を開く  
三澤彩奈 中央葡萄酒株式会社 取締役・栽培醸造部長  
女性醸造家の熱い思いが生んだ世界に羽ばたく山梨・勝沼のワイン



- 9 地域の底力——岐阜県美濃市  
地域の伝統を守り未来を見据える  
「うだつの上がるまち」岐阜県美濃市



- 16 対談／守・破・創  
千家和比古 出雲大社権宮司  
布野幸利 日本銀行政策委員会 審議委員  
古代の神々が現代に息づく「出雲大社」の悠久なる信仰

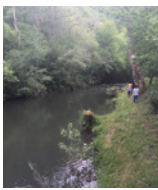
- 20 歴代日本銀行総裁小史～ Short History ～ 第2回  
第二代総裁 富田鐵之助

- 22 FOCUS → BOJ ③ 日本銀行システム情報局  
日本銀行が運用するシステムの安定稼働に向けた取り組み  
日本の金融システムを24時間、陰ながら支える

日本銀行のレポートから

- 26 「経済・物価情勢の展望」(展望レポート) —2019年10月—  
28 「金融システムレポート」—2019年10月—

- 32 トピックス  
令和元年10月台風第19号に伴う災害に対する日本銀行の対応 ほか



- 35 AIR MAIL from Brussels  
ベルギー釣り日誌

## 表紙のことば

日本銀行函館支店は明治二十六年（二八九三）に出張所として開設されました。継続して存在する日本銀行の拠点としては大阪に次いで二番目に古い歴史を持ちます。

末広町にあった初代店舗は、明治四十年（一九〇七）の函館大火により焼失してしまいました。その後、明治四十四年（一九一一）に支店となり、直後に建設された二代目店舗は、辰野金吾博士らの設計による本格的な洋風建築でした。しかし、竣工から一三年後、大火により再び焼失してしまいました。跡地に建設された三代目店舗は、耐震・耐火構造の建物で、現在も「函館市北方民族資料館」として利用されています。

四代目となる表紙の店舗は、昭和六十三年（一九八八）に東雲町に新築されたものです。建物外壁には薄い小豆色の花崗岩を採用し、エキゾチックな雰囲気がある函館の歴史的街並みとの調和を図るとともに、北海道開拓の玄関口である函館にふさわしい明るさと落ち着きを兼ね備えています。



表紙・画 北村公司

中央葡萄酒株式会社 取締役・栽培醸造部長

# 三澤彩奈

Ayana Misawa

日本を代表するワインの産地、山梨県甲州市勝沼町で大正時代から一〇〇年近い歴史を紡いできた中央葡萄酒は、二〇一四年に世界最高峰のコンクールで金賞を受賞したことにより、現在、国内外から注目を集めている。そのワインを造ったのは、世界的にも数少ない女性醸造家として活躍する三澤彩奈さん。これまでのご苦労や日本のワインが世界的に認められた理由、さらには地元勝沼の活性化につながる将来の展望を、三澤さんに伺った。



WINE

会社

# 女性醸造家の熱い思いが生んだ 世界に羽ばたく山梨・勝沼のワイン

ワインの伝統国から新興国まで  
世界各国を訪ねて知識と技術を研鑽

けんさん

——大正十二年（一九二三）創業の歴史あるワイナリー「中央葡萄酒」を営むご家庭に生まれ、おじい様やお父様がワイン造りにいそしむお姿をご覧になりながら育ったと思いますが、小さい頃から醸造家として跡を継ぐとと考えていましたか。

三澤 小さい頃からワイン造りをしていて祖父や父の姿を見て育ち、ワイン造りの仕事にはと

ても大きな意味があるのを感じていましたし、憧れてもいましたので、ほかの道に進むことは考えなかったですね。ただ、私がかつた頃は女性の醸造家が少ないので、日本に一人もいなかったため、自分がワイン醸造家になることをイメージするのは難しかったですね。

——二〇〇五年にフランスのボルドー大学醸造学部留学され

ました。

三澤 渡仏するときに、醸造家になると決めていたわけではありませんでした。ワイン造りには関わっていいかと思っていました。日常会話のままならなかったのですが、留学当初は語学学校でフランス語を学びながら大に学に通いました。ボルドー大学は、ワイン業界においてはスターのような教授が多かったのですが、どの授業も聞き逃すまいと必死でした。一番前に座り、授業を全部録音して通学の往復に聞いていました。発酵や微生物

物に関する事、また、いいワインを造るために科学をどう駆使するかなどを学んだほか、レベルの高いテイステイングを経験しました。そうした中でワインの原料であるブドウの栽培への興味が出てきたんです。ボルドー大学での一年半のカリキュラムを終えた後、ブルゴーニュの専門学校に進み、結局、留学は三年近くに及びました。

フランスのようなワインの伝統国だけではなく、ワイン業界では「新世界」と呼ばれる新興国のワイン造りも学んでみたい

という思いもありました。フランスからの帰国後、縁あって、一カ月間南アフリカの大学院でブドウ樹の生理学を学ぶ機会を得ました。フランスでは栽培方法や醸造法などが法律で決まっているのですが、南アフリカはそうした点が比較的緩やかで、いろいろなアイデアがあつておもしろかったですね。醸造家と

して働きだしてからも、日本でのワイン醸造の閑散期に、南半球、具体的には、ニュージーランド、オーストラリア、チリ、アルゼンチン、ふたたび南アフリカで、ワインメーカーでの仕込みの修業を重ねました。「新世界」でのワイン造りをもっと知りたいという強い思いに突き動かされていたように思います。

## 男性中心、体力勝負の世界できらめく ブドウとワインを慈しむ女性の感性

—— 海外のワイナリーでは、女性の醸造家は多いのですか。

三澤 海外でも、まだまだ少ないですね。一〇年ほど前ですが、ワイン造りが盛んな西オーストラリアのマーガレットリバーという産地で働いたとき、「女性の醸造家を雇ったのは初めてだ」と言われました。醸造期の約三カ月間、醸造家はみんな近く

朝起きて掃除する役割。二四時間ほとんど働きづめの時期には、夜中になり疲れてくると、ビールを飲みながら「よし、もう一丁がんばるか」という雰囲気になるのですが、そういう体育会系で男性的なテンションに憧れつつも、仲間に入れない部分がありましたね。

女性が少ない理由としては、やはりワイン造りが体力勝負ということが多いと思います。私自身は、社員の誰よりも体力があると思っていますが（笑）。

ただ、でき上がったワインやブドウに対して、男性が持つていない母性的な感覚で接することができるのは、女性特有のことかもしれません。

—— 日本では、男性より女性のワインファンの方が多いような気がします。女性の醸造家が造るワインの方が、消費者の感覚が合いそうですね。とはいえご著書によれば、醸造家になることを、ワイナリーの社長であるお父様に伝えた際、「地獄にようこそ」と言われたとか。

三澤 醸造期の忙しさは本当に

## 世界最高峰のワインコンクールが 認めた日本のブドウ「甲州」の実力

—— そもそも山梨がワイン造りに適しているのはなぜなのでしょうか。

三澤 ワイン造りは、ブドウの栽培が八〇%を占めると言われています。山梨の気候は昼夜の寒暖差が大きく、晴天率が高いため、ブドウの栽培に適しているんです。

地獄。生活のすべてがワイン優先で、休みもなく、毎日必死です。でも、ひたすらいいブドウ、いいワインを造るための日々なので、充実しています。父は、日本のワインがまだ無名だった頃から、勝沼で根付いていた棚栽培ではなく、ヨーロッパで一般に行われている樹を上へ伸ばしていく垣根栽培を取り入れるなど、世界に向けてチャレンジしていました。そんな父と一緒に、いいワインを造るために、今でも試行錯誤の日々です。

—— その山梨の地で造られた「キュヴェ三澤 明野甲州 2013」が、二〇一四年、ロンドンで開催された世界最高峰のワインコンクール「デキャンター・ワールド・ワイン・アワード」で、日本初の金賞を受賞されました。

三澤 賞をいただいたのは「甲



みさわ・あやな●山梨県甲州市勝沼町で4代続くワイン醸造所オーナーの長女として生まれる。2005年ボルドー大学ワイン醸造学部入学。卒業後、ブルゴーニュの専門学校に通い、06年フランス栽培醸造上級技術者資格を取得。帰国後、実家の中央葡萄酒株式会社に入社。14年に「キューヴェ三澤 明野甲州2013」がデキャンター・ワールド・ワイン・アワードで日本初の金賞を受賞。以降、グレイスワインの甲州が6年連続で金賞を受賞。また、16年の同アワードでは「Grace Extra Brut 2011」「Grace Koshu Private Reserve 2015 (グレイス甲州)」でアジア初のプラチナ賞・ベストアジア賞を受賞。現在、中央葡萄酒株式会社取締役、栽培醸造部長を務める。父、三澤茂計氏との共著で『日本のワインで奇跡を起こす 山梨のブドウ「甲州」が世界の頂点をつかむまで』（ダイヤモンド社）がある。

州」という日本固有の品種のブドウで造ったワインです。この品種はもともと、南コーカサスで生まれたものです。シルクロード沿いに中国大陸を通って日本にたどり着いたことがDNAからわかっています。ワイン用のブドウ品種は、南コーカサスで発祥しています。ワイン用のブドウとして同じように生まれながらも、ヨーロッパに伝播した他の品種と、日本に伝播した甲州はその長い歴史の中で異

なる用途に使われていきました。私たちは山梨の地で、日本に伝播した甲州をヨーロッパに伝播した品種と同じように育てたらどうなるのかということを試しました。ですから突拍子もないことをしたのではなく、誰も挑戦していないだけで、ごく当たり前のことをやった、というのが正直なところです。先ほど、ヨーロッパと日本、それぞれに伝播したブドウが異なる用途に使われたと言いまし

たが、日本でもブドウとともにワインを造る技術やキリスト教のようにワインと密接に関わりのある文化が入ってきていたから、早々からワイン造りに適したブドウが栽培されていたと思います。しかし、一二〇〇年ほど前の日本では、ブドウほど糖度が高く甘いものはなかったでしょう。日本に入ってきたブドウは、食用や薬として根付いていったようです。日本でワイン造りが始まったのはたかだか約一四〇年前の明治初期。そうした歴史的な流れの中で選ばれてきた甲州の枝は、ワイン造りに必ずしも適したものではなかったかもしれません。

—— 枝を選ぶというのは、どういう意味ですか。  
三澤 ブドウは種から植えるのではなく、樹から植えます。ワイン造りをする場合は、糖度が高い房や粒が小さくてなるべく凝縮した実をつける樹を選んで苗木にします。ワイン用と、食用とでは目的が異なりますから、かつてはワインにするという目線で苗木を増やしていた人

はいなかったはずですが。もともととはワイン用として生まれたブドウの品種なのに、歴史を経る中で、日本の甲州は本来持っていたポテンシャルから離れてしまったのではないかと思いません。

—— その甲州で、これまで誰もやらなかったことをやって勝ち取った金賞だったんですね。受賞した時の思いをお聞かせください。  
三澤 大手と違って広告費にコストをかけられない私たちのような中小のワイナリーにとって、コンクールに出品して評価をしてもらうのは、宣伝効果が大きいんです。なかでも「デキャンター・ワールド・ワイン・アワード」は、あまたあるコンクールの中でもトップクラスですから、ロンドンで受賞した後、甲州への注目度が大きく高まりました。これはうれしかったですね。甲州の伸びしろと秘めた可能性をあらためて感じました。甲州を使った日本のワイン自体も、今後はもっともっと発展していくのではないのでしょうか。



## 勝沼のブランドカアップと ワイン造りを次世代に継ぐために

——今、日本では全国的に地域経済に元気がなく、若い人が地元から流出する状況が見られます。地元勝沼の振興や活性化に、どのように関わっていかうと思っておられますか。

三澤 ワイン新興国、例えば中国で今一番有名なのは寧夏（ニンシャ）という産地ですけれど

も、寧夏は女性のオーナーが多いらしくて、生産者が一体となって、ワインの本場フランス

などに追い付き、追い越そうとがんばっていると感じました。

今の勝沼では、ワイナリー同士の仲はいいのですが、連携した取り組みに乏しいんです。自社のことと同じように産地のために、というロマンを持って生きていた父の世代とは少し状況が異なりますね。

そうした中、私自身がやるべきことは、醸造家としていいものを造って海外にもアピールするのはもちろんですが、GI（ジオグラフィカル・インディケーション）への対応にも取り組む必要があると思っています。GIは地域ブランドの地理的表示をする国の基準で、二〇一三年にワインとしては初めて「山梨」が認定されたんです。これまでは海外に輸出するときに「メード・イン・ジャパン」「ワイン・オブ・ジャパン」としか書けなかったものが、「ワイン・オブ・ヤマナシ・ジャパン」と書け

るようになったのは、国からある種の財産をいただいたような感覚でした。このGIで保護された産地特性を、ワインの味わいに表現していかなければならないと思っています。将来的には、二〇代、三〇代といった若い世代の、小さなワイナリーの醸造家と一緒に、「勝沼」というGIをつくらうと。例えばブドウは甲州しか使えないといったきちんとしたルールを設け、勝沼ならではの特性を出していきたいと考えています。造り手にとって、地域の価値を未来につないでいくことはとても重要です。それが勝沼にとっては将来的な財産になると思いますので、大きな目標として進めていきたいと思っています。

その他にも、地元の方限定で、無料のワインスクールを開催しています。日本産だけではなく、いろいろな国のワインを皆さんに試飲していただくのですが、それによってワインにもっと親しんでもらえたらいいなと。ワインを知り、ワインの産地山梨、勝沼のことを考えるきっかけに

していただけたら、という思いがあります。

——ワインに対する評価が高まり、世界から認められると、事業規模を大きくするという選択肢もあり得ると思いますが、いかがですか。

三澤 私がこのワイナリーを継ぐのであれば、そうしたことは全く考えていないですね。生まれ育った勝沼の地と、そして祖父や父が守ってきたブドウ「甲州」やワインの歴史とクオリティーを大切にしながら、自分の美学である「スモール・イズ・ビューティフル」を貫きたいと思っています。

——ちなみに、今年のワインはいかがでしょうか。

三澤 今年は梅雨の時期が長く、気温もあまり上がらなかつたものの、夏になってから好転したので、ブドウの実りは期待が持てるのではないのでしょうか。

——味わうのを楽しみにしております。本日は、ありがとうございます。

（聞き手／情報サービス局長 中川忍）





地域の底力——岐阜県美濃市

# 地域の伝統を守り 未来を見据える 「うだつの上がるまち」 岐阜県美濃市

一三〇〇年の歴史ある美濃和紙を要に、  
大切に受け継いできた文化を今、  
まちの誇りとしてあらためて発信。  
岐阜県美濃市は次の千年を思い、  
さらなる地域の活性化をはかる。

## 大切に受け継がれてきた 誇れる美濃の伝統文化

岐阜県中央部に位置する美濃市のまちとしての骨格作りは、関ヶ原の戦いでの功績により飛騨高山藩初代藩主となった金森長近が一六〇五年に隠居し、長良川沿いに小倉山城を築いたことに端を発する。その後尾張藩領となった後も、市内を流れる長良川が人や物資、そして文化を運び、まちの繁栄に寄与してきた。

約四〇年に及ぶ岐阜県庁での勤務を経て二〇一四年から市長を務めている武藤鉄弘氏は、自らの故郷でもある地元への思いを語る。「美濃市には、数々の誇るべきも

金森長近が建てた小倉山城跡は現在「小倉公園」として市民の憩いの場に。まちなかや長良川を眺める格好のビューポイントであり、春は約一〇〇〇本の桜で彩られる。



のがあります。しかしながら外から見てみると、地元の方がそれを誇りと思わず、生かし切れていないのではないかと感じ、そうした状況を何とかしたいと思っ

ていたんです。その後、市

長として市民の皆さんと接するうちに、非常に心が豊かで文化力が高いなどの印象を持つようになりました。いろいろな取り組みに対して協力的で、市民の力も感じています」

武藤氏のいう美濃市の誇りの代表格が、美濃和紙だ。東大寺正倉院には

八世紀にこの地域一帯でつくられたといわれる和紙が収蔵されており、少なくとも一三〇〇年前には美濃周辺で手すき和紙文化があったことが明らかになっている。

「本美濃紙の技術が二〇一四年にユネスコの無形文化遺産となり、さらには二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックの表彰状に美濃手すき和紙が採用されました。市民の皆さんがそのすばらしさをあらためて認識するようになったのはうれしいことです」

その和紙や原料を扱う商家をはじめ、江戸時代から大正時代にかけて建てられた家々が残るかつて

の城下町もまた、美濃市の誇りだ。一九九九年には国から「重要伝統的建造物群保存地区」の認定を受け、電柱の地中化整備などが進められてきた。

その事業が進められた理由のひとつに、人口減があると武藤氏は語る。現在の美濃市の人口は約二万



1916（大正5）年竣工。現存する吊り橋では日本最古とされる橋長113mの「美濃橋」。国指定重要文化財。現在工事中。





左上・左下／「うだつの上がるまち」目当ての観光客の姿も見られる重要伝統的建造物群保存地区。もともと防火目的だったうだつはやがて、家の繁栄を表すようになり、「うだつが上がる」の語源になった。右／江戸時代の町医者者の住居を利用し、和紙やちぎり絵の作品を展示する「町並みギャラリー山田家住宅」など、古民家を利用した観光施設がまちなかに点在する。



人。約三万人を数えた一九五五年以降、減少が続いている。「人が減れば、商いが滞ります。市民を相手にするだけでは地域は活力を失う。ならば利便性や生活を維持するために外から人を呼ぼう、海外からの旅行者を含めた観光産業に力を注ごう」という発想です」

それぞれの住民が歳月を経た家を大切に思い、暮らしてきたからこそ、重要伝統的建造物群保存地区として認められたと武藤氏が話す古い町並みは現在、「うだつの上がるまち」として注目を集めている。「うだつ」とは江戸時代に屋根の両端に設けられた防火壁のことで、今でもまちの随所に見られる。富裕の象徴ともいわれ、豪商たちがかつてその美しさを競い合ったという。

当初、観光産業を推し進める上

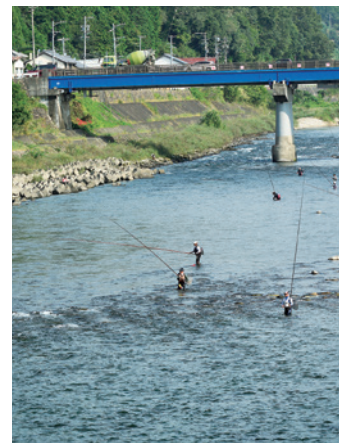
での課題は、宿泊施設や飲食店の不足だった。しかしながら古民家を活用したホテルの誕生や、寄贈された古民家を市が整備し、商業施設として無償で貸し出す官民が連携した取り組みの開始により、人の流れや思いは変わりつつあるという。

### 長良川の水の良さを生かし 旨し酒造りを目指す

重要伝統的建造物群保存地区の一角には、安永年間初期の建築で国指定重要文化財となった一七七二年創業の小坂酒造場がある。美濃市に残る唯一の酒蔵。二代目を担う代表取締役の小坂善紀氏は、代表銘柄「百春」についてこう語る。

「赤だしみそが食生活を支える岐阜県の酒は全般的に濃いといわれますが、うちはとりわけしつかりした味わいです。仕込みに使われるのは長良川水系の地下水。長良川は肥沃な土壌を流れるため、ミネラル分が豊富で発酵が進みやすく、香りも出やすいという特徴があるんです」

小坂酒造場では長年にわたり、



上／鮎釣り（あや釣り）で知られる長良川は、水の供給源として市民の暮らしを支える一方、子どもたちにとっては格好の遊び場。市長の武藤氏は「美濃市民の生活の一部」と語る。下／1910（明治43）年築、長良川流域ではもっとも古い歴史を誇る「長良川発電所」。国登録有形文化財。



かつて美濃市内に複数あった酒蔵は現在、小坂酒造場のみ。代表取締役の小坂善紀氏は、岐阜県内のほかの酒蔵とともにイベントなどに参加し、PR活動に努める。

越後杜氏や南部杜氏を招いて酒造りを行っていたが、後継者不足の問題などから蔵人（酒蔵の醸造職人）のひとりが杜氏を務めることとなり八年目を迎えたという。

「二〇〇年もの長い間商いを営んでいると、そういう困難や変革の時期が必ずあるのだと思います。日本酒の売り上げは、昭和五十年代がピークで、今は一番大

変なとき。一方で各蔵の味わいが百花繚乱で、こんなに個性ある日本酒が飲める時代はないと思います。幸い、うちは杜氏が旨い酒を造ってくれていますから、トレンドを気にしすぎることなく、これからも個性ある酒を地道に造り、ほかの酒との差別化を常に図っていきたいと思っています」

試飲した仕込み水はやわらかで



右／令和元年全国新酒鑑評会で金賞を受賞した代表銘柄「百春」と、低農薬栽培の酒米で仕込む「さんやほう」。下／1772（安永元）年築とされる建物は、職人技が生む曲線を描いた「むくり屋根」がその特徴のひとつ。右端はうだつ。



甘みがあり、酒もまた懐深いふくらみを感じられるおいしさ。和食に限らず、洋食や中華料理とも相性が良さそうな印象だったが、実際、小坂酒造場の酒は中国、スイス、フランスに輸出されているという。また二〇一八年には国際的なワインコンクール「IWCC（インターナショナルワインチャレンジ）」の「SAKE部門」で銀賞、銅賞を受賞したのに加え、二〇一九年十月には、日本酒人気が高まるパリのイベント「サロン・ド・サケ」に出展するなど、海外で高い評価を得ている。

地元に向けては二〇〇四年から毎年蔵開きが行われ、また、例年六月に開催される日本酒を使用した梅酒づくりも人気の的だ。通常でも蔵の一部は見学が可能で、美濃を訪れた観光客の多くが立ち寄る。「まちづくり」という特別な意識はありませんが、われわれが酒を造り続けること自体が観光につながるのかなど。目先のことにはとられすぎず、将来を見据えてしっかりと構えていかななくてはならないと思っています」

小坂氏は控えめに語るが、「百春」の旨さは、味わたった人と美濃を結び架け橋になるような気がした。

### 先人の知恵が救った 伝統芸能を未来へと継ぐ

美濃市が一年でもっともにぎわうのは、江戸時代の雨乞いをルーツとする四月の「美濃まつり」だ。桜色に染めた美濃和紙で飾った三〇基ほどの「花みこし」や山車、練り物などがまちを華やかに盛り上げる。その祭りに欠かせないのが、国選択無形民俗文化財の即興劇「美濃流し仁輪加」。町内会が

上／岐阜県美濃加茂市美濃太田駅～郡上市北濃駅間を結び、長良川の眺めを楽しめる長良川鉄道。重要伝統的建造物群保存地区は美濃市駅から至近距離だ。下／奈良時代創建といわれる「洲原神社」は、かつて美濃国における白山信仰の要的存在だった。



母体となった一五団体によって行われていると語るのは、美濃市仁輪加連盟副会長の中村辰也氏だ。「仁輪加は江戸時代に大阪や京都をはじめ広く見られた大衆の娯楽で、美濃には天保年間（一八三〇～四四年）の頃に入ったといわれています。現在も各地にその名残はありますが、美濃市仁輪加連盟のような保存団体が存在し、そ

の伝統文化が継承されているのは、全国でも数少ないようです」  
祭りの夜、美濃流し仁輪加は、笛、鼓、三味線、リヤカーに乗せた太鼓などを演奏しながら町を練り歩く。決められた会場で披露される寸劇では、時に社会を風刺しつつ「地口落ち」という同音異義語を重ねた落ちで笑いを取る。昔ながらの言葉が使われるため、失

盟のような保存団体が存在し、その名残はありますが、美濃市仁輪加連盟のような保存団体が存在し、その

ながらの言葉が使われるため、失



上／満開の桜を彷彿とさせる花みこし。和紙でできた花は、ひとつひとつ手作業で染められる。下／町の辻々で演じられる美濃流し仁輪加。笑いを誘うその展開には、話題性の高いニュースが盛り込まれることも多い。（写真提供：美濃市）

美濃市仁輪加連盟副会長の中村辰也氏は、コンクールにおいて多数の優勝回数を誇る町内会で脚本を担う仁輪加作家でもある。お話を伺ったのは江戸時代に建てられた商家で、市指定有形文化財の「旧今井家住宅・美濃史料館」。



われつつある方言の保存にも一役買ってきた。その一方で、伝統の継承と人材の確保が課題だと中村氏は話す。

「かつては美濃和紙で財をなした旦那衆が、お金と運営の両面で仁輪加を支えてきました。娯楽の多様な影響から一時期は途絶えていた地区もありましたが、昭和四十年代に『仁輪加コンクール』が始まり、地区で出来を競い合う土壌ができたことで、現在まで残ってこられたのだと思います。お囃子や言い回しの工夫や研究も進み、地区ごとに特色があります。今後、こうした伝統文化を守りつつ、いかに若い世代に興味をもってもらうか、あらたに考えていくのがわれわれの役目だと思っています」

現在、美濃市では小学校の授業に仁輪加が取り入れられている。また、仁輪加を演じるのは成人の男性に限られるが、囃子やリヤカー引きなどには女性や子どもたちも参加させるなど、時代に即した柔軟な対応が進みつつある。

二〇一九年十一月には、文化庁の補助事業として東京で開催された「全国民俗芸能大会」で、美濃流し仁輪加が演じられた。大舞台への招聘と客席からの拍手は、関係者の活力になったに違いない。

### オリンピックの追い風のなか 努力を重ねる美濃和紙職人

美濃流し仁輪加をはじめとする祭りやまちの繁栄と文化を担ってきた和紙産業もまた、後継者不足の問題を抱えている。現在、手すき和紙職人は約二〇名。その多くが、美濃和紙に魅せられて他所から移住した方々。岐阜県笠松町出身の家田美奈子氏の場合は、日本画を学んでいた学生時代に素材と

なる和紙に興味を覚え、美濃和紙の魅力に惹かれたのが人生の転機になった。

「和紙は産地によって特徴が異なります。日本画で通常使われる越前和紙が厚めなのに対して、美濃和紙は薄くて透かしたときにコウゾの樹皮の繊維がとともきれいで印象に残りました」

家田氏は本美濃紙保存会会長の和紙職人澤村正氏のもとに弟子入りし、四年間の修業を経て二〇〇〇年に独立した。

「今でこそ一年中紙すきは行われますが、かつては冬場、冷たい水を使うつらい作業。稼ぎのいい生業でもありませんから、子どもたちに家業を継がせなかつた職人も多かったと聞きます。だからこ

そ私のような外から入ってきた職人も多く、それが美濃和紙に新しい風をもたらしているという面はあると思います」

季節や気温など環境により、紙をすく舟の状態は異なるため、調整して均一にする必要がある。最終的な仕上げは、干してみなければわからない難しさもあると家



右／アート展での受賞作品などを展示する「美濃和紙あかりアート館」の作品。下／紙すき用の舟。コウゾと水、トロロアオイを入れ、竹箒で舟の中の液をすくって揺すり、一枚ずつ紙をすいていく。



毎年10月に開催される美濃和紙あかりアート展は、隣の関市で日中に開催される「刃物まつり」と連携し、集客をはかる。(写真提供：美濃市)



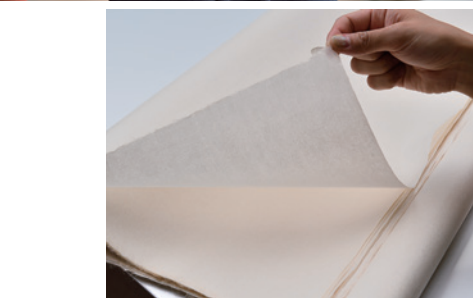


左／美濃和紙職人の家田美奈子氏と、繊細な美しさをたたえた作品。1日にすくのは80～150枚で、前後の作業を含めると完成まで2週間程度要する。下／和紙づくりの工程のひとつ、コウゾの「ちり」と呼ばれる黒皮や変色した部分を流水のなかで取り除く「ちりとり」。



田氏は話す。「思った通りの紙がすけない、もう一掃りすればよかったということは、今でもあります。どうすればよかったのかと考える。その繰り返します」

家田氏によれば、そんな手すき和紙の未来を切り拓くため、地元ひらの小学生が和紙づくりを学び、卒業証書を自分ですく取り組みが行



われているという。毎年十月、古い町並みを和紙の灯籠が飾る「美濃和紙あかりアート展」での手すき実演をはじめ、国内外のワークショップ、イベントなどにも職人が参加するようになった。

「私は子どもがいるので行けませんでしたが、イタリアやイギリスに赴いた職人もいます。海外の人は和紙にさわったこともないので、その質感に驚かれたようです。職人としても尊敬しますと言われた、との話を聞きました。その昔、職人は紙をすくだけで済みましたが、今は、私も含めて多くの職人がお客様から直接注文を受ける等、販売も手がけています。伝統を守ることも必要ですが、『こんな紙をつくってよ』という気軽なコミュニケーションもできるよ

う、少しずつ商いのやり方を進化させていく必要もあると思っています」

家田氏は、顔料などを用いた和紙の加工も手がけているとか。穏やかながら、その口調には、自分が惹かれた美濃和紙を多くの人が手に取り、その良さを実感してほしいという思いが感じられ、感慨深く胸に刻まれた。

### 多角化経営で目指すのは 住み続けられるまちづくり

ピーク時の明治時代には大小三〇〇〇～四〇〇〇軒あった手すき和紙の業界も、ライフスタイルの変化や洋紙・プラスチックなどの台頭による和紙の需要低下等により、今では二〇人ほどまで職人が減った。しかしその逆境に極めてポジティブに立ち向かっているのが、機械すき和紙を手がける丸重製紙企業組合代表理事の辻晃一氏だ。

東京と名古屋でのベンチャー企業勤務を経て、二〇〇九年に家業を継いだ後、辻氏が自らに課したテーマは「美濃と和紙を元気にする」。SNSで自社の情報発信を徹

底した上、職人による工房への案内や工場見学の実施を重ねたことが、旅行社による美濃和紙ツアーの開催にまで至った。二〇一三年には、毎年美濃和紙あかりアート展に合わせて和紙や加工品の販売を行う「みの紙まつり」をスタートさせた。

二〇一九年七月には県外の企業と提携して市から古民家を借り、宿泊施設「NIPPONIA 美濃商家町」をオープン。「世界に美濃和紙を発信したい」との思いから、当ホテルの施設内に多彩な和紙をそろえた和紙専門店 Washinary も営むようになった。

それに先立つ二〇一七年には、電力会社「みの市民エネルギー」を設立。現在は日本卸電力取引所から仕入れをしているが、将来的には地元のクリーンエネルギーの地産地消モデルを作る計画がある。美濃和紙の手すき職人、機械すき事業者だけではなく、原料となるコウゾやトロロアオイの栽培者も減少する状況を危惧する辻氏



ラフティングやカヤック、川原でのバーベキューなど、長良川はアウトドアの場としても人気。今後、さらなる誘客を目指すための、観光コンテンツとしても期待される。



上／辻兎一氏が代表理事を務める丸重製紙企業組合は、1951年に辻氏の祖父が手すき和紙職人と共同で出資し創業。高度成長期でも24時間体制は取らないなど職人を第一に思う姿勢は、形を変えて辻氏に受け継がれている。下／辻氏が代表を務める宿泊施設「NIPPONIA 美濃商家町」は和紙の原料問屋であった旧松久才治郎邸の蔵や屋敷を改修。（写真提供：NIPPONIA 美濃商家町）

（注）SDGs (Sustainable Development Goals) / 持続可能な開発目標として、二〇三〇年までに貧困や飢餓、エネルギー、気候変動、平和的社會などの諸目標を達成するための国際連合が主導する活動。一七の大きな目標と、それらを達成するための具体的な一六九のターゲットで構成され、目標の一番目に「住み続けられるまちづくりを」がある。

は、将来的には農業生産法人を立ち上げたいとの構想も描く。そんな辻氏の信条となっているのは、二〇一五年に国連（国際連合）で採択された「SDGs」(注)の「住み続けられるまちづくりを」だ。「僕の中では和紙も古民家も電力もすべて本業。地域を守るためのビジネスです。お金を稼ぐだけでなく、地域内でお金や資源を回すという意識が強い。僕は、『SDGs』の達成を通じた住み続けられる美濃のまちづくりを目指しています」

辻氏がまちづくりに携わるようになったきっかけのひとつは、卒業した小学校と中学校が廃校になったこと。「僕も同級生も故郷を思う気持ちには強いのですが、子どもの教育を考えたら学校がない場所には、帰りにくい。ですから、学校をつくる教育事業のビジョンも自分のなかにはあります」

数々の活動を続けるなか、古民家の活用について相談を受けるなど、周囲の意識が変わりはじめたことを辻氏は実感しているという。「明るい情報があれば、また別の誰かの勇気やあらたな一歩につながるかもしれない。飲食店、雑貨店、シェアオフィスなど古民家を再活用できたら、間違いなくまちは元気になると思います。そして、

美濃を元気なまちにして、子どもたちにバトンタッチしたいです」

さらなる千年先を思い  
まちのチャレンジは続く

市長の武藤氏によれば、二〇二〇年には外資系のホテルがオープンする予定だとか。二〇一五年に「清流長良川の鮎」が世界農業遺産に登録されたことで、美濃市、郡上市、関市、そして岐阜市が連携した誘客も進行中だ。

周遊、滞在型の観光への扉は、少しずつ開いている。武藤氏の話に明るい未来を思い描きながら辞そうとしたところ、市長室に飾られた花々がすべて美濃和紙でできていることに気づいた。質感のある美しさにほれほれしていると「美濃和紙でつくった、私の名刺を破ってみてください」と武藤氏。とまどいながらも試したところ、力を入れてもしなるだけで、裂け目が生じない。武藤氏の顔が綻んだ。

「正倉院の収蔵品からもわかるように、美濃和紙は千年以上もつほど丈夫なんです」

美濃市ではその手すき和紙の技



術をさらなる千年先に伝えるため、「美濃和紙」伝承千年プロジェクト」を立ち上げ、技術の継承とまちの活性化を図ると武藤氏は話す。後継者の育成や業界の振興に加え、加工等で付加価値をつけた新商品の開発にも補助金を出すなど力を注ぐという。

市長をはじめ美濃市を思う方々の大小のチャレンジにより、あらたな流れが生まれようとしている様は、舟のなかで幾度となくすかれ、カウンの繊維が組み合ってできると重なった。美濃のまちの最大の誇りは、和紙同様にしなやかだが強い人の心なのかもしれない。

対談

# 守創 破

島根半島の西部、日本海からほど近い場所に鎮座し、年間600万人を超える参拝客が訪れる出雲大社。その「縁結び」信仰の由来は何か？ 時代とともに「遷宮」を繰り返す意義はどこにあるか。出雲大社の祭祀に仕える千家和比古権宮司と、出雲出身の布野幸利審議委員が、神話を読み解きながら古代ロマンに満ちた大社の歴史を振り返りつつ、時代を経ても変わらぬ使命に話が及んだ。



日本銀行政策委員会 審議委員

## 布野幸利

Yukitoshi Funo

1947年島根県出雲市生まれ。島根県立大社高校卒業。神戸大学経営学部卒業。米国コロンビア大学経営大学院(MBA)修了。2000年トヨタ自動車(株)取締役、03年米国トヨタ自動車販売(株)社長、05年同社会長、06年トヨタモーターノースアメリカ(株)取締役会長を経て、09年トヨタ自動車(株)代表取締役副社長に。13年、(株)国際経済研究所代表取締役就任。15年より日本銀行政策委員会審議委員。



出雲大社権宮司

## 千家和比古

Yoshihiko Senge

1950年島根県出雲市生まれ。島根県立大社高校卒業。國學院大學大学院文学研究科(日本史考古学専攻)修士課程修了。國學院高等学校教諭を経て、85年から出雲大社に奉職。現在、権宮司。千家家は出雲大社の祭神である大国主大神に仕え、大社の祭祀を担う出雲国造を代々勤めている家系である。共著に『出雲大社 日本の神祭りの源流』(終風舎)、『古代を考える出雲』(吉川弘文館)などがある。

### 古代の神々が現代に息づく 「出雲大社」の悠久なる信仰

本殿境内から出土した  
四世紀後半の祭祀具

**布野** 千家家は代々、出雲大社の宮司職を務めてこられました。権宮司は古代史にも造詣が深く、いらっしゃいます。お家柄の関係かなと想像しますが、どういう経緯で古代史に関心を持つようになったのでしょうか。

**千家** 小さい頃、父から「大きくなったら神主になるか」と聞かれたとき、三人の男兄弟の中で私だけが「はい、なります」と、訳も分からず調子のいいことを言っただけです。記憶にないのですが(笑)。ところが、大学進路で迷いました。父に相談したところ、「回り道もいい経験だ。学問にもいろいろある」と、一冊の本を与えてくれました。「祭祀考古学」の本でした。勉学の道を教えてくれました。育った環境でしょうか、もと歴史には興味があり、歴史学を専攻しようと決めたのです。そしてその父がくれた本に影響されたのか、大学では考古学を専攻し、各地の発掘調査に参加しました。それが古代への扉を開けました。



卒業後しばらく教員生活をしていたのですが、やはり父祖の道にと再び大学に通い神道学を学び出雲大社に勤めました。そこで、とくに神話伝承などと絡みながらの古代史への関心も深まっていきました。しかし、出雲大社は古代だけのではなく、現代に至るそれぞれの歴史過程の中でさまざまな歴史的役割を担って存在し続けているわけですから、古代を中心としながらも現代に至る歴史の営みを探ることで、歴史全体を見通す目も養われたように思います。

**布野** 私も出雲の生まれなので、歴史に興味を持っています。出雲大社は『古事記』『出雲国風土記』にも出てくる非常に古い神社ですが、れども、起源はどのくらいまでさかのぼることができるでしょうか。  
**千家** 二〇〇〇年に出雲大社の境内から巨大な柱が出土して、古代の高層神殿が歴史的に実証されたと全国紙の一面を飾り話題になりました。実はその時、もう一つの重要な発見がありました。巨大柱とは真逆の小さな祭祀用の玉類です。赤メノウの勾玉、そしてちくわを輪切りにしたような

滑石製の白玉という極めて小さな玉で、形態から四世紀後半の祭祀具でした。それが出土したことで、少なくとも四世紀後半には出雲大社の境内地で神祭りが行われていたことが明らかになったのです。こうした滑石製の祭祀具は中央政府（大和朝廷）が発信展開したのですが、四世紀後半段階での出土例は全国的に限られていません。茨城県の鹿島、千葉県の香取、安房、福岡県の宗像沖ノ島、そして出雲大社など数カ所に点的に存在しているくらいありません。

日本の神々を大まかに区分すると、神話的には「天」を故郷・出自とする天津神のグループと、「地」を故郷・出自とする国津神のグループがあります。天津神とは中央権力と内部的にそれを支え連なる有力豪族関係の神々。一方で国津神は地域の地主的な土着的な神々です。面白いのは、こうした四世紀後半の祭祀具が出土した所のお社の祭神は、出雲大社を除けばどこも天津神の系統、つまり中央権力に内部的に関わる神であることです。五世紀になるとこうした祭祀具は全国的に広く展開し

ますが、出雲大社の出土はそれ以前です。『古事記』の神話で出雲に関する話はおよそ五分の二を占めますが、そうした神話上のみならず歴史的にも出雲大社が古くから国津神の中心格として重要視されていたことがわかってきました。

練を受けられる話があります。大国主大神は、須佐之男命の娘神の須勢理毘売に助けられながら試練を乗り越えられていけます。実はそこまで神名はオオナムチというお名前だったのですが、ついに須佐之男命はオオナムチに向かつて「わが娘・須勢理毘売を正妻とし、大国主」となつて国づくりに励め」と呼びかけられます。

**千家** そうですね。境内の外、東へ二〇〇メートルのところにも命主社という出雲大社の関係社があります。ここでは二〇〇〇年前の祭祀遺物が出土していますので、その頃から広く境内を含む一帯が聖地として認識されていた状況がうかがえます。

そこで、はじめて大国主大神と出雲大社との関係が明らかになりました。これは歴史的には出雲を中心とする地域連合の様相を神話として語ったものですが、とうとう須勢理毘売が嫉妬を起こされたため、大国主大神は「もう出かけるのはやめ、これからは妻・須勢理毘売とずっと一緒にいる」と言われ、そして契りの酒盃を交わして互いに首に手をかけ合っている。今も出雲大社に鎮まられている、という強い絆が縁結びの最も古い伝承です。

### 「縁結び」の二つの由来と「遷宮」で初めに返る苦勞

**布野** 出雲大社は「縁結びの神社」として有名ですが、出雲大社と縁結びにどういいうわれがあるのでしようか。

もう一つ、いわゆる「国譲り」の神話も縁結びにつながります。大国主大神は地上の国づくりをされましたが、やがて天津神グループ

**千家** まず一つに祭神の大国主大神にまつわるロマンス伝承があります。『古事記』の出雲神話の中に、大国主大神が須佐之男命の治める世界を訪ねられ、数々の試

プの中心の天照大神からその国を譲るよう言われ承諾されます。これは歴史的には地上の行政権を中央の政治権力に譲渡することを意味します。一方、大国主大神は神々の世界を治められることになりました。大国主大神側からは「国譲り」、天津神側からは「神譲り」になるわけです。縁結びは見えない糸で結ばれ云々とよく言いますが、見えない糸の縁結びこそ神の仕業として大国主大神の治められる見えざる神々の世界の出来事で、その象徴的中心が神譲りされた大国主大神ということになります。旧暦十月は通常、「神無月」と言われますが、全国の神様がこの時期に集まられるという出雲では「神在月」と呼びます。見えな

い糸の縁結びを行う「出雲大会議」が、神々の世界を治められる大国主大神のもとで行われるという縁結び信仰につながります。

**布野** 二〇〇八年から今年（二〇一九）の三月まで「平成の大遷宮」が行われ、出雲大社は建物などが修造されました。遷宮の意義やご

苦勞についてお聞かせください。

**千家** 大国主大神をお祀りすると

いう常設の本殿建物の造営の始まりは、少なくとも六五九年には求めることができます。以来、造営遷宮を繰り返して今日に至っていますが、時代ごとに神様をお祀りするにはどういう形が最もふさわしいかを人々は考え工夫をし、さらに新たな創造も加えて、造営を繰り返してつないできたのです。昔のやり方がそのまま、というわけではありません。

遷宮に込められた一つの意義は、「理想の始まりの初発に返る」ということです。始まりの勢いある状態をいつまでも維持し続けることは困難ですから、一旦リセットして始まりの心に想いを寄せ、その生命力・エネルギーを清新に復活よみがえらせて再出発しようとするところにあります。高層神殿時代の古代では何年ごとという式年はありませんでした。その後、規模の縮小した中世ではおよそ三〇年ごと、建築仕様が掘立柱式から礎石立柱式に変わった一六〇九年からは六〇年ごとの基準で遷宮を行ってきています。

この六〇年に一回というのは、技術の伝承という面で非常に難しいところがあります。伊勢神宮は二〇年に一回ですから人生時間の中でノウハウが経験蓄積できます。しかし出雲大社の場合は人生時間の中で遷宮に出会えるか不明です。記録はありますが、記録の「行間」にある現場感覚をつかむには難しいものがあります。

例えば、屋根は檜皮で葺き上げますが、出雲大社の本殿は大きいですが、長さ四尺（約一・二メートル）のものが使用されます。ほかの神社仏閣では檜皮は長くてもその半分程度。四尺という規格外のものを使った経験のある檜皮葺き職人は、今回の場合、六〇年前の遷宮に従事した方になります。現場に原寸大の模型を設け、職人さんたちが試し葺きの訓練を重ねて本作業に入りました。

### ヒスイや管玉が物語る 日本海文化圏との交流

**布野** 『古事記』の神話によると、

大国主大神は正妻の須勢理毘売をはじめ、九州・宗像の多紀理毘売、山陰・因幡の八上比売、北陸・高志の沼河比売など多くの妻を持ち

ます。これは「国造り」を通じて出雲は各地と交流があったということ伝えていいると思っんです。

**千家** かつて、出雲大社はラグーン（潟湖）のほとりに位置しました。八世紀に編さんされた『出雲国風土記』では神門水海という名前前で出てきますが、大きな汽水湖（注1）で、天然の港の役割を果たしていました。九州と北陸の日本海沿岸航路の結節点にあたります。日本海や河川を通して各地へ船で移動する人の交流が古くからあったのです。

交流の際、人々の頭の中には情報があり、手には技術があり、船には物を積みます。そうした中で、日本海文化圏の一大拠点として出雲は存在性を高めていくわけです。先に、出雲大社の命主社で祭祀遺物が出土したとお話ししましたが、一つは新潟県糸魚川市を流れる日本海に注ぐ姫川の渓谷で産出するヒスイの勾玉、一つは北部九州産の青銅製の戈で、ご例示の神話伝承を裏書きするような、九州から、北陸からという往来交流を示す明瞭な物証でもあります。

また、この関東でも、埼玉で古

（注1）汽水湖／淡水中に海水が浸入している湖沼。



墳時代前期の出雲の特徴的な土器

である鼓形器台と、出雲の技法の管玉(注2)が出土しています。こ

の管玉は碧玉(へきぎよく)の産地に近く、古代

で著名な出雲の玉造温泉の一角で

つくられていました。日本のほか

の地域では両側から穴を穿ちます

が、出雲は片側からうまく穴を開

けてつくるなど技術的にも特異な

ものでした。さらに面白いことに

埼玉には出雲系の古い神社もあり

ます。

**布野** 玉作りという最先端の技術

を持った人々が、出雲から関東に

移動していったのですね。出雲が

交流の起点となっていた様子がう

います。年間参拝者数はどれくら

いですか。

**千家** 六〇〇万人台で推移してい

ます。最近はお参りの方々の生の声

を聞くのと、よく境内現場に出て歩

いているのですが、東アジア地域

からお越しになる方々も多いです

ね。欧州地域はまだ少ない印象で

す。

**布野** 山陰地方もいろいろな観光

スポットがあるとはいえ、やはり

出雲大社のブランド力、吸引力は

強いと思います。地元で観光に携

わる方々と、出雲大社ほどのよう

な形で連携していますか。

組織が結成されて積極的に活動を

されてもいますが、一過性の遷宮

効果ではなく深く根をはったもの

にと、広くさまざまな方面の方々

と協力し合い、「点」ではなく「線」

になるよう努めています。そこで

重要なのは地元だけでなく、外部

からの積極的な参加や声です。そ

うした新しい力、発想を導入する

ことでも出雲の活性化を進められ

たら良いですね。

**布野** 現在の神門通りでは、私が

育ったころから商売を続けておら

れるお店もありますが、新しく来て

事業をやっておられるところが増

前近代までは基本的に農事暦に

沿ってお祭りが構成されてきまし

たが、近代に入り産業構造は変容

し、高度成長以降さらに顕著です。

出雲大社の神(かみありさい)在祭(いなき)も昔どおりの奉

仕ではありません。稲佐の浜での

神迎え神事は、一昔前はひそやかに

行われていましたが、今では全

国から約一万人の方々がさまざま

な縁結びを求めて、夜陰の浜辺に

参列される中で奉仕しています。

**布野** 私が子どものころ、神迎え

の夜は家を出てはいけないうとか、

テレビもつけてはいけないうとい

ことで、ひっそりとしていました。

(注2) 管玉/円柱状の玉で、穿った穴に糸を通し複数

数を連結して腕飾りや首飾りなどに用いる。

## 歴代日本銀行総裁小史

## 第二回

第二代総裁  
富田鐵之助

とみたてつすけ



【総裁任期】

明治21年(1888)2月21日～明治22年(1889)9月3日

「日本銀行総裁」と聞いて、どのようなイメージをお持ちでしょうか？ この「歴代日本銀行総裁小史」のコーナーでは、歴代総裁の生涯をたどりつつ、総裁在任時に取り組んだ事跡や当時の日本銀行の歴史などをご紹介していきます。今回は第二代総裁の富田鐵之助です。

富田鐵之助は、天保六年（一八三五）に仙台藩士の家に生まれました。安政三年（一八五六）、藩命により江戸で西洋砲術を学び、帰藩後に藩の西洋砲術の先生になりました。文久三年（一八六三）、再度、藩の命で江戸に上り、幕府の海軍奉行であった勝安房守（勝海舟）の私塾「氷解塾」に入ります。その勝の推薦により、慶応三年（一八六七）には、米国に留学し、主として経済学を学びました。なお、米国に留学する際に乗船した米国船コロラド号には、後の第二〇代内閣総理大臣・第七代日本銀行総裁の高橋是清も乗っていました。

米国留学の翌年、明治維新を迎え、幕府からの留学生は帰国を余儀なくされた中、富田は学業優秀であったことから、そのまま明治政府の留学生として認められ、留学



横浜正金銀行は、国立銀行条例により明治13年(1880)に設立された。写真は明治37年(1904)に建てられた同行本店。現在、神奈川県立歴史博物館として利用され、国の重要文化財・史跡に指定されている。(写真提供：神奈川県立歴史博物館)



明治22年(1889)発行のお札の左側には富田鐵之助の筆跡で「日本銀行」と記されている。



富田の故郷宮城県仙台市にある東華学校(宮城英学校が改称)の遺址碑。富田のほか、新島襄など学校設立関係者の氏名が刻まれている。(写真提供：同志社東京校友会)

を続けました。明治五年(一八七二)にニューヨーク領事心得に抜擢され、副領事に昇格した後、在英國公使館一等書記官を務め、帰国。帰国後は大蔵省(現在の財務省)に移り、日本銀行創立の事務を担当しました。明治十五年(一八八二)の日本銀行設立とともに、日本銀行副総裁に就任します。初代総裁吉原重俊(注1)とともに、大阪支店の設置や不換紙幣(注2)の整理、兌換銀行券(注2)の発行など重要案件に取り組みました。

初代の吉原総裁逝去後の明治二十一年(二八八八)、第二代総裁に就任します。総裁就任後も副総裁時代からの懸案事項に取り組みました。しかし、従前大蔵大臣から要請されていた、外国為替専門銀行である横浜正金銀行への低利融資枠の大幅拡大について、引き続き拒否したことがきっかけとなり、辞任します。総裁在任期間は一年半と短いものでしたが、副総裁在任時から通算七年にわたり、富田は、日本銀行の創業期において中心的な役割を果たしたといえるでしょう。

総裁辞任後の明治二十三年(一八九〇)、帝国議会が開設された際には、貴族院議員に勅撰され、その職を二五年にわたり務めたほか、東京府(現・東京都)知事も歴任しました。経済界においては、富士紡績(現・富士紡ホールディングス)や横浜火災海上保険(現・あいおいニッセイ同和損害保険)の創立に尽力しました。また、共立女子職業専門学校(現・共立女子学園)や宮城英学校(後に東華学校と改称(明治二十五年閉校)の設立に関わるなど、人材の育成にも力を注ぎました。

そのほか、自身の結婚に際して、日本で初めてといわれる夫婦契約証を取り交わし、当時の新聞に取り上げられました。

富田は、大正五年(一九一六)二月、満八〇歳で死去しました。同年五月、故郷宮城県仙台市で追悼会が催され、政官財界人をはじめ多くの人が別れを惜しみました。

(注1) 不換紙幣/正貨(金貨・銀貨など)と引き換える保証のない紙幣。  
(注2) 兌換銀行券/同額の正貨と引き換えることのできる銀行券。

# 日本の金融システムを 二四時間、陰ながら支える

日本銀行では他の金融機関と連携する決済システムを柱として、その他も含めて一〇〇以上のコンピューター・システムが毎日の業務を支えています。そのシステムを三六五日、二四時間体制で管理し、安定した運行を担っているのが「システム情報局」のスタッフ。システムの開発から、想定しうる多種多様なアクシデントに向けた対策、万が一の際のバックアップ体制の構築、トラブルを未然に防ぐための職員への啓発活動、技術の劇的な進化に対応する細やかな情報収集まで、社会的な要請に応えながら、日々、さまざまな取り組みが行われています。

## 国民の生活にもつながる 日本銀行のシステム

金融政策運営や決済サービスの提供、国庫・国債事務、さらには一般的な事務処理まで、日本銀行の業務の多くはコンピューター・システムに支えられています。そのシステムの開発や安定した運行、管理などを担うのが、全六課・一七ゲ

グループからなる「システム情報局」。現在、大小含めて一〇〇以上のシステムが稼働している、同局システム企画課長の松裕司<sup>まつゆうし</sup>さんは話します。

「日本銀行が現在運用しているシステムの中で代表的なものとしては、日本銀行と金融機関を接続して、資金や国債の決済を行う日銀ネット（日本銀行金融ネットワークシステム）が挙げられます。

万一、日銀ネットの運行に大きな問題が生じるようなことがあれば、金融機関を通じて日々行われているお金のやり取りが滞るなど、日本の金融基盤の安定が損なわれ、ひいては国民生活にも悪影響が及びかねません。このため、安定運行の確保のための取り組みは大変重要です」

日銀ネットがわれわれの暮らしにどう関わっているのか想像が付きにくいかもしれませんが、個人に関わるお金の動き、例えば国からの年金支給や、家賃の振り込みなどについても、最終的な決済は日銀ネットを通じて行われています。だから



システム運行の様子

からこそ日銀ネットの安定的な運行は、国民の暮らしを守ることもつながっているというわけです。

「情報通信技術の世界は日進月歩。今年三月に公表した日本銀行の中期経営計画（二〇一九～二〇二三年度）においても、『情報技術が金融経済に広範かつ多様な影響を及ぼしつつあることを踏まえ、情報技術にかかる取り組みを適切に進めていくことが、業務・組織運営の両面で重要』と明記されています。システム情報局は、そうした情報通信技術の活用を通じ、日本銀行が行う業務の高度化や効率化、安定化に取り組むなど、日本銀行の業務をシステム面から支える、極めて重大な役割を担っている部署です」

状況の急激な変化を追求するためには、常に情報通信技術の動向に目を光らすことが必須です。

「昨今の情報通信技術の進歩のスピードを考えれば、情報収集は普段から欠かすことができません。各国の中央銀行や国内の公的機関等とも連絡を取り合い、最新の情報を収集しています。自然災害やサイバー攻撃（注）などさまざまな脅威にも対応できるようにしておかなければなりません。そうした脅威の度合いが刻々と変化していくなか、自分たちが得



海外中銀との意見交換

た情報の活用の仕方もしっかり考え、必要とあらば、関係部署と連携しながら対策を講じていく。そうした力が求められています」

### 三六五日、二四時間体制でシステムの運行を見守る

システムの安定運行のため、具体的にどのようなことが行われているのでしょうか。システムを構成する機器や回線の故障など、システムにトラブルはつきものですが、そうしたトラブルに対応するのが日銀ネット構築運行課システム運行グループです。グループ長の寺中毅さん（たけし）によれば、各種システムの安定的な運行管理のため、三六五日、二四時間

体制のシフトが組まれているとのこと。

「システム障害などが発生したときに大切なのは、その発生原因と影響範囲を迅速かつ正確に把握すること。障害の原因は必ずあります。システムの専門スタッフの協力を得ながら、私たちはそれをまず探っていく。必要に応じて、システムを使う現場から情報を収集して状況を判断し、専門スタッフと共に原因の究明を行います」

時には、夜間や休日に呼び出されることも。二〇一八年の北海道胆振いぶり東部地震では、朝の三時台に寺中さんの携帯電話が鳴りました。この時は幸いにしてシステムは滞りなく運行できましたが、停電により道内の決済システムが使えなくなった場合、広範囲に影響を及ぼす可能性があることも念頭に、内外の関係先と連携しつつ、情報の収集に努めたそうです。

「歯科治療中に電話が鳴ったときは、焦りましたね」と苦笑しながら振り返るのは、同グループ企画役の有田真理子さん。緊張感のある場面で難しい判断が迫られることもあるのだとか。

「今のグループに配属された際、何かあったら『ひとりで抱え込まない』『声を出して』と言われました。そうした助

(注) サイバー攻撃／コンピューターネットワークに侵入し、システムを破壊したりデータを盗んだりする行為。

言も踏まえ、難しい判断を迫られるときには、遠慮せず周囲に相談するようにしています。システム障害対応は、関係者の皆が知恵を絞れば必ず良い対応策が出るんです。個々人の力ではなくチームでアクシデントに対応しようという意識がグループに浸透しています」

システム障害の対応部署ということ  
で、スタッフの皆さんは心安まる時がないのではないかと、との問いかけに寺中さんが笑顔でこう答えてくれました。

「確かに、皆、常に緊張感があると思います。ただ、日本銀行の仕事の土台であるシステムを守っている、という自負があるので、大変さよりもむしろやりがいの方が大きいんです」

### 定期的な大規模訓練で組織の実践力を向上させる

システムの安定運行のためには、いざというときへの備えも欠かせません。システム企画課総務グループ企画役の藤原裕一ゆういちさんは、BCP（業務継続計画）体制の整備のための取り組みの一例をこう語ります。

「例えば想定外の自然災害をはじめ大規模なアクシデントが生じてもシステムを継続して稼働させていく体制づくりが

大事です。そのひとつが、関西に設けられたバックアップシステム（通常のシステムが使えなくなった際の予備のシステム）です。仮に大きな災害でメインセンターのシステムや機器が利用できなくなったり、関東で通信が遮断された場合は、関西に設置されたこのバックアップシステムを立ち上げ、通常の運行が引き継がれるようになっていきます」

備えは机上の空論であってはいけません。いざというときに迅速かつ確実に対処できるよう、例年春頃には「システム障害対策訓練」が実施されます。

「日銀ネットを利用する約五〇〇の金融機関も参加して行います。日本銀行は、金融機関との連絡体制を確認しながら、



障害対応の様子

日銀ネットなどのバックアップシステムを立ち上げ、金融機関も日本銀行のバックアップシステムに接続先を切り替えた  
り、自社のバックアップシステムを立ち上げたりします。こうした大規模な訓練を定期的に行うことで、実際に災害が起きたときに、金融機関も含めた関係者が円滑に対応できるように、体制を整えながら実践力を高めています」

業務の処理はシステムが行いますが、障害などが起きた場合に備えてもっとも重要なのは、常日頃からの連携と事前の想像力だと藤原さんは言い切ります。

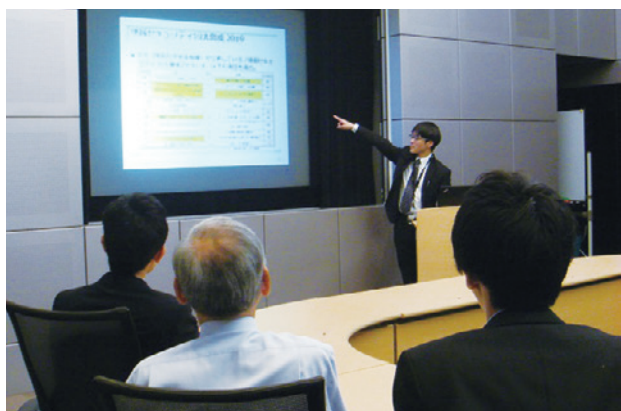
「各金融機関、官公庁などの担当者と日々コミュニケーションを密に取りながら、情報、経験を共有する。システムが担う部分は年々増していますが、システムを動かすのは人。いざというときの対応という点では、関係者同士の連携が何より大切です。それから想像力。アクシデントが起こっていない通常時から、最悪の事態への対応を、想像力をフルに働かせて考えます。これは難しいことではありますが、この仕事の醍醐味だいごみでもあります。醍醐味だいごみと思えるのは、国民生活を支え続けるシステムを担っている、という強い意識に支えられているからです」



## セキュリティ対策のために 日々重ねられる啓発活動

システムの安定運行のためには、レベルの高いセキュリティ（安全）対策を施し、サイバー攻撃による外部からの侵入などを防ぐことも重要です。情報セキュリティ課企画役補佐の中村啓佑さんは、担当業務についてこう語ります。

「情報セキュリティ課は、日本銀行のシステムセキュリティ確保にかかる施策の企画、立案および実務を担当しています。行内外の状況等を踏まえつつセキュリティ対策の指針を策定しており、その



情報セキュリティに関する研修の様子

重要性を研修等を通じて、日本銀行の職員に説明し、理解を深めてもらっています。指針を作るだけでなく、行内への地道な啓発活動も私たちの大きな仕事です」

コンピュータウイルス等の侵入経路が多岐にわたり、偽メールひとつとっても手口が巧妙になっている今の時代、システムセキュリティに関する対策は、逐次更新されていると言います。また、セキュリティ対策に特化した強化月間を設け、重点的な啓発活動も行っています。こうした取り組みが、中央銀行のセキュリティレベルの維持・向上に貢献しています。

「セキュリティ侵害により機密情報が流出したり、システム運行が滞ると、日本銀行の業務に支障を来し、国民生活にも影響を及ぼしかねません。そうした事態を招かないためのセキュリティ面での職員の理解度が高まっていると感じます。同時にセキュリティ対策はバランスが大事。必要なセキュリティレベルを確保しつつ、コストと効果、業務の効率性やユーザーの利便性などを考えながら適切に進めていくことが求められています」

現在、日本銀行に限らず国内の公的機

関などは、二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックに向け、気を引き締めて対応しています。

「国際的に注目を集めるイベントですので、開催までの間、公的機関や関連する事業者に対するサイバー攻撃が増える」と想定されています。何も起きていないように見えても、実は、ひそかに攻撃あるいは攻撃準備が行われている可能性があることを念頭におきながら対応しなければなりません。セキュリティ対策は情報が命。常日頃から官公庁はもちろん、海外の中央銀行などと幅広く連携し、情報を共有するのも重要な業務です」

\*\*\*\*\*

勉強会や研修、訓練を繰り返し行い、常に情報や体制を更新。システム情報局は、技術や社会環境が刻々と変化するなかで、中央銀行のシステムの安定的で効率的な運行を実現すべく強い使命感を持って日々尽力しています。業務の処理にシステムは欠かせませんが、そのシステムを構築し、動かすのは人。日本銀行の業務は今日も、システム情報局のスタッフの地道な努力によって支えられています。



# 日本銀行のレポートから

日本銀行は、1、4、7、10月の政策委員会・金融政策決定会合において、先行きの経済・物価見通しや上振れ・下振れ要因を詳しく点検し、そのもとでの金融政策運営の考え方を整理した「経済・物価情勢の展望」(展望レポート)を決定し、公表しています。本稿では、2019年10月の展望レポート(基本的見解は10月31日、背景説明を含む全文は11月1日公表)のポイントを解説します。

\*全文は日本銀行ホームページに掲載されています。 <https://www.boj.or.jp/mopo/outlook/index.htm/>

## 「経済・物価情勢の展望」(展望レポート)

二〇一九年十月

### 二〇一九～二〇二一年度の 中心的な見通し (図表1・2)

#### 【景気】

当面、海外経済の減速の影響が続くものの、国内需要への波及は限定的となり、二〇二一年度までの見通し期間を通じて、景気の拡大基調が続くとみられる。

輸出は、当面、弱めの動きが続くものの、海外経済が総じてみれば緩やかに成長していくもとで、基調としては緩やかに増加していくと考えられる。国内需要も、消費税率引き上げなどの影響を受けつつも、きわめて緩和的な金融環境や政府支出による下支えなどを

背景に、増加基調をたどると見込まれる。

#### 【物価】

消費者物価(除く生鮮食品)の前年比は、当面、原油価格の下落の影響などを受けつつも、見通し期間を通じてマクロ的な需給ギャップがプラスの状態を続けることや中長期的な予想物価上昇率が高まることなどを背景に、二%に向けて徐々に上昇率を高めていくと考えられる。

#### リスクバランス

経済の見通しについては、海外経済の動向を中心に下振れリスクの方が大きい。物価の見通しにつ

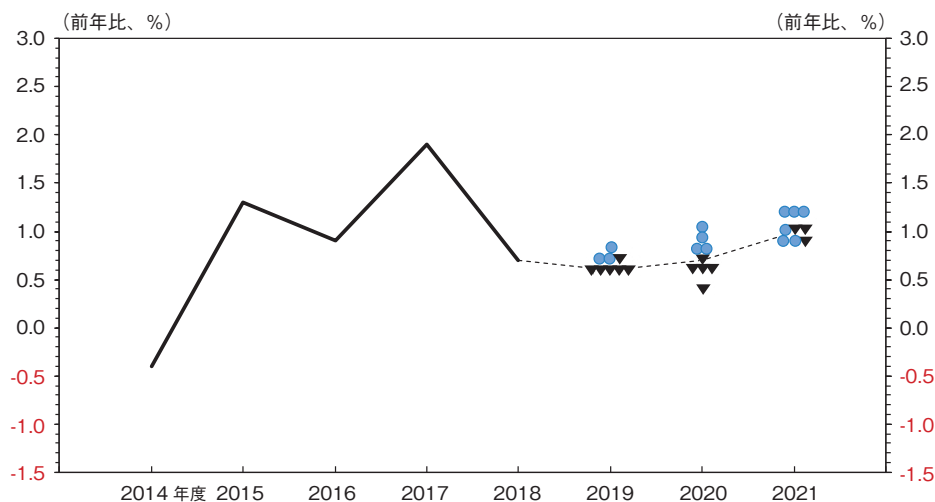
いては、経済の下振れリスクに加えて、中長期的な予想物価上昇率の動向の不確実性などから、下振れリスクの方が大きい。二%の「物価安定の目標」に向けたモメンタムは維持されているが、なお力強さに欠けており、引き続き注意深く点検していく必要がある。

#### 金融政策運営

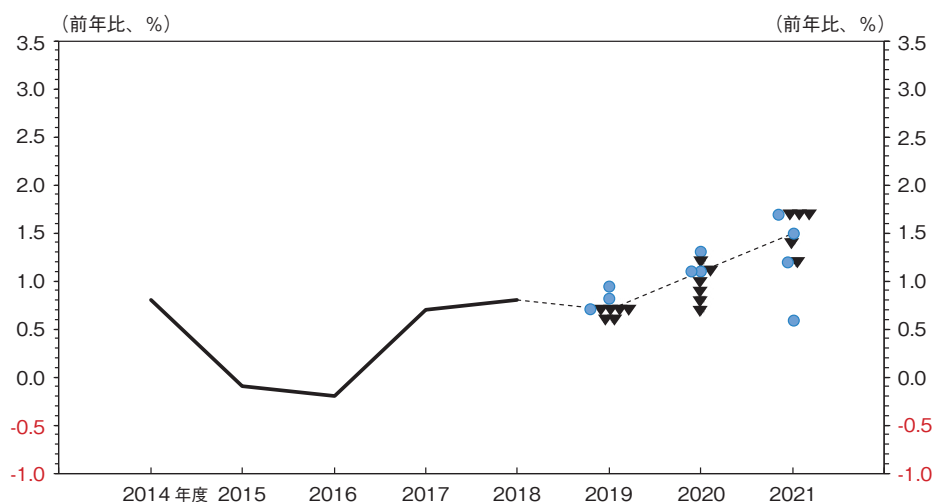
二%の「物価安定の目標」の実現を目指す、これを安定的に持続するために必要な時点まで、「長短金利操作付き量的・質的金融緩和」を継続する。マネタリーベースについては、消費者物価指数(除く生鮮食品)の前年比上昇率の実

図表1 政策委員の経済・物価見通しとリスク評価

(1) 実質 GDP



(2) 消費者物価指数 (除く生鮮食品)



(注1) 実線は実績値、点線は政策委員見通しの中央値を示す。

(注2) ●、△、▼は、各政策委員が最も蓋然性が高いと考える見通しの数値を示すとともに、その形状で各政策委員が考えるリスクバランスを示している。●は「リスクは概ね上下にバランスしている」、△は「上振れリスクが大きい」、▼は「下振れリスクが大きい」と各政策委員が考えていることを示している。

(注3) 消費者物価指数 (除く生鮮食品) は、2014年度、2015年度については、2014年4月の消費税率引き上げの直接的な影響を除いたベース。

図表2 政策委員見通しの中央値

	実質 GDP	消費者物価指数 (除く生鮮食品)	(対前年度比、%)
			(参考) 消費税率引き上げ・教育無償化政策の影響を除くケース
2019年度	+ 0.6	+ 0.7	+ 0.5
(7月時点の見通し)	(+ 0.7)	(+ 1.0)	(+ 0.8)
2020年度	+ 0.7	+ 1.1	+ 1.0
(7月時点の見通し)	(+ 0.9)	(+ 1.3)	(+ 1.2)
2021年度	+ 1.0		+ 1.5
(7月時点の見通し)	(+ 1.1)		(+ 1.6)

(注) 教育無償化政策については、高等教育無償化等が2020年4月に導入されることを前提としている。

績値が安定的に二%を超えるまで、拡大方針を継続する。政策金利については、「物価安定の目標」に向けたモメンタムが損なわれる惧れに注意が必要な間、現在の長

短金利の水準、または、それを下回る水準で推移することを想定している。今後とも、金融政策運営の観点から重視すべきリスクの点検を行うとともに、経済・物価・

金融情勢を踏まえ、「物価安定の目標」に向けたモメンタムを維持するため、必要な政策の調整を行う。特に、海外経済の動向を中心に経済・物価の下振れリスクが大

きいもとで、先行き、「物価安定の目標」に向けたモメンタムが損なわれる惧れが高まる場合には、躊躇なく、追加的な金融緩和措置を講じる。



# 日本銀行のレポートから

日本銀行は、金融システムの安定性を評価するとともに、安定確保に向けた課題について関係者とのコミュニケーションを深めることを目的として、金融システムレポートを年2回公表しています。本レポートの分析結果は、日本銀行の金融システムの安定確保のための施策立案や、考査・モニタリング等を通じた金融機関への指導・助言に活用しています。また、国際的な規制・監督・脆弱性評価に関する議論にも役立てています。金融政策運営面でも、マクロ的な金融システムの安定性評価を、中長期的な視点も含めた経済・物価動向のリスク評価を行ううえで重要な要素の一つとしています。

\*全文は日本銀行ホームページに掲載されています。 <https://www.boj.or.jp/research/brp/fsr/index.htm/>

## 「金融システムレポート」

二〇一九年十月

### 二〇一九年十月号の 特徴と問題意識

今回のレポートでは、次の三つに  
力点を置いて分析を行った。第一  
に、グローバルな金融危機以降、大  
手行等を中心に、レバレッジドロー  
ンやCLOを含めた海外貸出・海  
外クレジット投資が拡大し、それに  
伴い海外との連関性が高まっている  
ことを踏まえ、邦銀の海外向けエク  
スポージャーについて、潜在的なり  
スクや脆弱性を分析・評価した。第  
二に、地域金融機関について、近年  
収益力の低下が続くもとで、経費の  
節減や非資金利益の拡大といった経  
営効率の改善に向けた取り組みがみ  
られていることを踏まえ、経営効率

性の動向や同一業態内のばらつき、  
その要因の分析を行った。また、分  
析結果を踏まえて、マクロ・ストレ  
ステストにおいて、先行き一段の経  
営効率の改善が行われた場合の収益  
効果を織り込んで、中長期シミュ  
レーションと将来のストレセス発生を  
想定したテストを行った。第三に、  
足もと地域金融機関を中心に国内の  
信用コスト率が低水準ながら上昇し  
始めていることを踏まえ、信用コス  
ト増加の背景や先行きの見通しにつ  
いて、整理した。なお、レポートの  
構成として、今回から、国内外の金  
融脆弱性を総括的に点検する章(IV  
章)を設けた。また、各種リスクの  
評価に当たり、従来の信用・市場・  
流動性リスクに加え、近年重要性が

増しているリスク(サイバーセキュ  
リティ、反マネーロンダリング、  
デジタルライゼーションへの対応等)  
について項目(V章六節)を設けた。  
要旨は以下のとおり。

### 金融仲介活動の動向

日本銀行の金融緩和を背景に、金  
融仲介活動は貸出・証券市場の両面  
で積極的に行われている。国内貸出  
は、貸出金利が既往ポトム圏で推移  
するもとで、経済成長を上回る前年  
比二%程度のペースで増加してい  
る。CP・社債市場でも、きわめて  
低い発行レートのもとで、大企業の  
資金調達が増加している。国際金融  
市場では、世界経済の減速懸念や地  
政学的不確実性を背景に、株価はや



期とは異なるリスクが蓄積されている可能性がある。国内与信の増加は、足もとの景気拡大基調を支えしている一方、やや長い目でみてわが国経済の成長が高まらない場合には、以上のような脆弱性がバランスシート調整圧力として働くことで、負のショック発生時の下押し圧力を強める可能性がある。

国際金融面では、邦銀の海外エクスポージャー拡大とともに、わが国金融システムが外貨調達面も含めて海外金融循環の影響を受けやすくなっている。とくに近年、大手行等を中心に、借り手の信用力が低いレバレッジドローンやこれを裏付けとする証券化商品（CLO）への投融资が増加している（図表4、5）。邦銀の海外貸出は、全体として質の高いポートフォリオが維持されており、保有CLOのほとんどはAAA格である。ただし、レバレッジドローンの借り手は景気悪化に脆弱であるほか、近年、貸付条件の引き緩みが続いており、CLOについても、経済・市場急変時の格付け低下、市場価格下落等のリスクに留

意が必要である。

### 金融システムの安定性

わが国の金融システムは全体として安定性を維持している。金融機関は、上記のような脆弱性を考慮しても、リーマンショックのようなテールイベントの発生に対して、資本と流動性の両面で相応の耐性を備えている（図表6）。

もともと、国内預貸業務を中心に、金融機関の収益性が低下を続けている。この背景には、低金利環境の長期化に加え、より長い期間でみれば、人口減少や成長期待低下に伴う借入需要の趨勢的な減少といった構造要因があると考えられる。そのもとで、大手金融機関はグローバル展開とグループベースの総合金融戦略を推進しており、システミックな重要性を高めている。地域金融機関は、国内貸出・有価証券投資面でリスクテイクを積極化しているが、それに見合ったリターンを確保できず、自己資本比率が緩やかな低下を続けている。先行きもこうした状況が長引くと、将来のストレス発生時の損失

吸収力低下が想定され、金融仲介機能の低下を通じて実体経済への下押し圧力が強まる可能性がある。

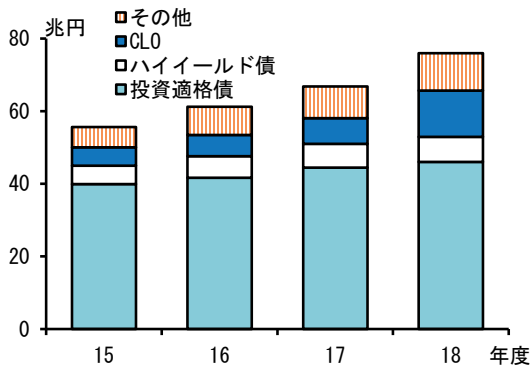
### 金融機関の課題

以上を踏まえ、金融機関に求められる経営課題は、次の四点である。第一は、収益力向上に向けた取り組みの強化である（図表7）。具体的には、①企業の課題解決や家計の資産

形成支援等の金融サービス提供力の強化、②リスクに見合った貸出金利の確保や非資金利益の拡大、③経費構造の見直しなどが挙げられる。金融機関は、戦略的に必要な投資は行いつつ、近年取り組んでいるこれらの経営効率改善策を一段と積極化し、基礎的収益力の向上を通じて、将来にわたるストレス耐性を確保していく必要がある。その効果的な推進の観点から、経営統合やアライアンスも有効な選択肢となり得る。第二は、積極的にリスクテイクを進めている分野におけるリスク対応力の強化である。地域金融機関では、ミドルリスク企業・不動産業向け貸出や、投資信託など有価証券投資面の

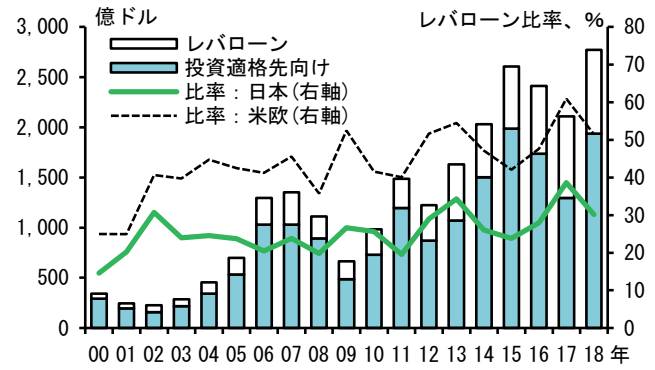
リスク管理強化である。大手金融機関では、海外投融資やこれに伴う外貨調達への対応のほか、グローバルかつグループベースの経営管理強化が求められる。第三は、デジタルライゼーションへの対応である。金融機関は戦略リスクを意識しつつ、デジタル技術の活用方針を明確化するとともに、サイバーセキュリティや反マネーロンダリングの体制整備を進めていく必要がある。第四は、適切な資本政策の実施である。金融機関は自己資本の適正水準や、配当、有価証券評価益の活用などのあり方を含めた資本政策を明確に定め、株主など幅広いステークホルダーと対話を深めていく必要がある。日本銀行は、考査・モニタリング等を通じて上記の金融機関の対応を後押ししていくとともに、マクロプルーデンスの観点から、金融機関による多様なリスクテイクが金融システムに及ぼす影響について注視していく。また、金融機関が構造的な課題克服に取り組んでいくうえで重要な要素となる金融制度の整備などについても、関係者と議論を行っていく。

図表5 大手行等の海外クレジット投資残高



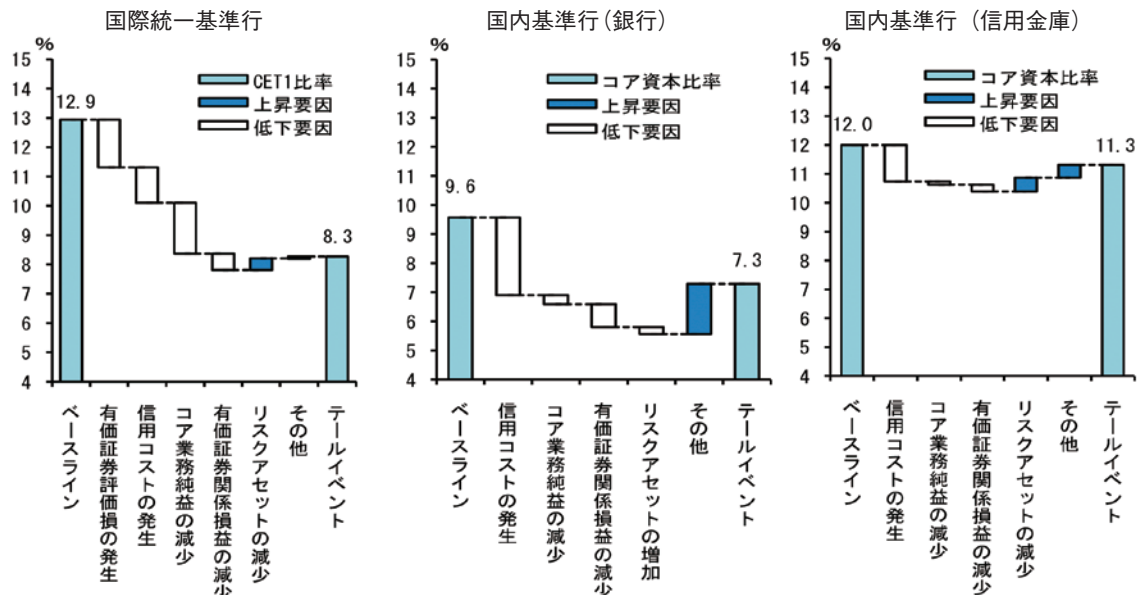
(注) 大手行等の保有する CLO のうち、99%が AAA 格トランシェ。  
(資料) 日本銀行

図表4 邦銀のシンジケート・ローン(シ・ローン) 引受動向



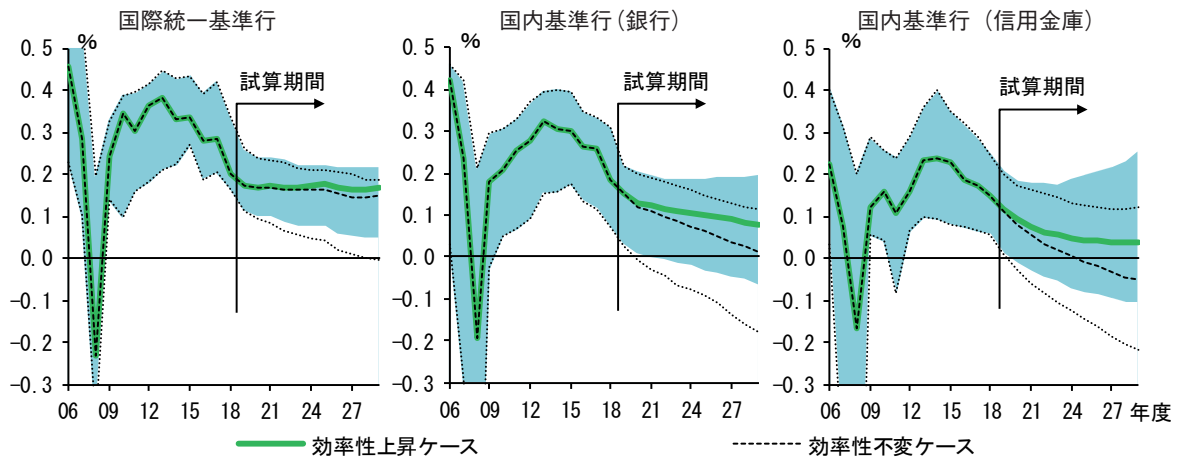
(注) 「投資適格先向け」は BBB 格以上のシ・ローン、「レバローン」は BB 格以下のシ・ローン。  
(資料) Dealogic

図表6 CET1 比率とコア資本比率の要因分解 (2022 年度)



(注) シミュレーション期間の終期(2022 年度末)における、ベースラインとテールイベント・シナリオ下の自己資本比率の乖離要因を表示。「その他」は、税金・配当、CET1 調整項目等の寄与の合計。

図表7 当期純利益 ROA (中長期のベースライン)



(注) シャドーは効率性上昇ケース、細点線は効率性不変ケースの 10-90% 点。

## 令和元年十月 台風第十九号に伴う災害に 対する日本銀行の対応

▼このたびの令和元年台風第十九号に伴う災害により被害を受けられた被災者の皆さまに對しまして、心よりお見舞いを申し上げます。

▼日本銀行では、令和元年台風第十九号に伴う被害により災害救助法が適用された岩手県、宮城県、福島県、茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、新潟県、山梨県、長野県および静岡県金融機関等に対し、各地の財務局等とともに、預金通帳や印鑑を紛失した場合における預金の払い戻しなどについて、適切な措置を講じるよう要請しました。

## 旧小樽支店金融資料館では 特別展を開催中

二〇二〇年二月十八日(火)まで  
▼明治・大正期に日本銀行の本  
店や小樽支店のほか東京駅など

を設計し、日本近代建築の礎を築いた辰野金吾(一八五四〜一九一九年)。二〇一九年は、辰野金吾の没後一〇〇年にあたります。その節目の年に、旧小樽支店金融資料館では、辰野金吾没後一〇〇年特別展「辰野金吾と日本銀行建築―同級生と協演のまち小樽―」を開催しています。

▼辰野金吾は日本銀行本店の設計のため一八八八年より欧



旧三井銀行小樽支店  
辰野金吾の同級生曾禰達蔵による設計

米各国の銀行建築を視察しました。帰国後、一八九〇年より建築工事監督として日本銀行本店本館(一八九六年竣工、国指定重要文化財)の建築を行いました。

▼その後も日本銀行の建築顧問として大阪支店(一九〇三年竣工、部分保存)や京都支店旧店舗(一九〇六年竣工、国指定重要文化財、現・京都文化博物館)、そして小樽支店(一九一二年竣工、小樽市指定有形文化財)など各地の支店の建築を担いました。辰野金吾が日本銀行の建築に関与した期間は二五年におよび、辰野金吾の建築家人生の重要なパートを占めています。

▼今回の特別展では辰野金吾がどのような歩みを経て日本銀行の本店や各地の支店を設計する



に至ったかをご紹介します。

▼また、辰野金吾が最初に建築を学んだ工部大学校造家学科(一八七七年に『工学寮』から改組)の同期には佐立七次郎、曾禰達蔵、片山東熊(とくぐま)がいました。小樽には、辰野による日本銀行旧小樽支店のほか、佐立による旧日本郵船小樽支店(一九〇六年竣工、国指定重要文化財)、曾禰による旧三井銀行小樽支店(一九二七年竣工、小樽市指定有形文化財)も現存しており、これらの建築についても併せてご紹介しています。



皆さまのご来館をお待ちしております。

【入館料】 無料

【休館日】 水曜日、年末年始

(二〇一九年十二月二十九日)

(日)～二〇二〇年二月五日(日)

【開館時間】 午前十時～午後五時(入館は午後四時三十分まで)

※最新の情報は金融資料館ホームページをご覧ください。

【所在地】 北海道小樽市色内

一―一―一六

【お問い合わせ先】 金融資料館

〇三四―二―二―二



### 京都支店が「にちぎん京都の休日セミナー」を開催

当日は、二日間で延べ約四五〇名の皆さまに、ご来場いただきました。

▼京都支店は、九月二十一日、二十二日に、旧店舗である京都文化博物館において、辰野金吾没後一〇〇年イベント「にちぎん京都の休日セミナー」を開催しました。

▼セミナーでは、肥後雅博京都支店長が「日本銀行京都支店旧店舗時代の京都経済」と題して、旧店舗で営業を行っていた時代(一九〇六～六六年)を中心とする明治維新以降の京都経済の歴史について講演を行いました。

講演では、近代都市化を進める中での第二琵琶湖疏水をはじめとした社会資本整備から、世界大戦や世界恐慌、高度経済成長期の京都経済について、当

時から約六〇年にわたり利用され、現在は京都文化博物館として親しまれています。イベント

は、日本銀行本店や東京駅と同様に辰野金吾が建築を手がけました。明治三十九年(一九〇六)

から約六〇年にわたり利用され、現在は京都文化博物館として親しまれています。イベント

は、日本銀行本店や東京駅と同様に辰野金吾が建築を手がけました。明治三十九年(一九〇六)

から約六〇年にわたり利用され、現在は京都文化博物館として親しまれています。イベント

は、日本銀行本店や東京駅と同様に辰野金吾が建築を手がけました。明治三十九年(一九〇六)

から約六〇年にわたり利用され、現在は京都文化博物館として親しまれています。イベント

は、日本銀行本店や東京駅と同様に辰野金吾が建築を手がけました。明治三十九年(一九〇六)

から約六〇年にわたり利用され、現在は京都文化博物館として親しまれています。イベント



辰野金吾が手掛けた京都支店旧店舗  
(現・京都文化博物館〈国指定重要文化財〉)



肥後支店長による特別講演の様子



お札の偽造防止技術の紹介コーナー

時の写真や経済の動きが分かるグラフを盛り込んだスライドを交えつつ振り返りました。一時間で約一〇〇年間の京都経済の歴史を振り返るといふ内容で、受講された方々は興味深く聴講されていました。

▼支店長講演のほかにも、支店の歴史や日本銀行の業務の紹介、お札の偽造防止技術や豆知識に関する講座のほか、辰野金吾が設計した日本銀行本店の建物を紹介するミニ講座も開催しました。受講者には、日本銀行京都支店を身近に感じていた

## 編集後記

■5月より令和の時代が始まりました。早いもので、もう年末を迎えようとしています。平成31年も含め、皆さまにとって今年はどうな一年だったでしょうか。昨年に続き、いくつもの大きな自然災害に見舞われました。被害を受けられた方々には、謹んでお見舞い申し上げます。一方、喜ばしい出来事もありました。ラグビーワールドカップでは、日本代表チームが初のベスト8に進出したことに加え、日本の関係者やファンに対して海外から称賛の声が多く寄せられました。天皇陛下の即位礼正殿の儀や後日のパレードでは、伝統と新しい時代との調和を感じました。長い歴史の中で、日本は幾多の困難に直面してきましたが、その都度、伝統をしっかりと守りつつ、新しい時代に柔軟に対応し、今日の発展を成し遂げました。今号で取り上げた出雲大社、勝沼のワイン、美濃和紙などは、こうした伝統の維持(ディフェンス)と変化への取り組み(オフェンス)を感じ取れる話題だと思います。ぜひお楽しみください。(中川)

※本誌は、全国の日本銀行本支店および貨幣博物館、旧小樽支店金融資料館等でお配りしています。個人の方の定期購読、郵送はお取り扱いしておりませんのでご了承ください。なお、既刊号全文をPDFファイル形式で日本銀行ホームページ上に掲載していますのでご利用ください。  
([https://www.boj.or.jp/announcements/koho\\_nichigin/index.htm/](https://www.boj.or.jp/announcements/koho_nichigin/index.htm/))

※本誌に掲載している内容は、必ずしも日本銀行の見解を反映しているものではありません。日本銀行の政策・業務運営に関する公式見解等については、日本銀行ホームページ(<https://www.boj.or.jp/>)をご覧ください。

にちぎん 2019年冬号  
編集・発行人 中川 忍  
発行 日本銀行情報サービス局  
〒103-8660  
東京都中央区日本橋本石町2-1-1  
☎03-3277-2405



デザイン 株式会社市川事務所  
印刷 株式会社アイネット  
禁無断転載

だけたほか、現存する辰野金吾設計の建物を肌で感じていただくことができました。

▼また、京都府金融広報委員会とも連携し、金融広報アドバイザーによる暮らしに役立つお金の講座も開きました。健康寿命を踏まえた老後資金の見積もり方や確保の仕方、金銭トラブルに巻き込まれないための注意点などについて丁寧に解説しました。

▼会場内には、常設の展示・体

験コーナーを設け、一億円(模擬券パック)や小判(レプリカ)の重さ体験、金塊や古いお札のレプリカ展示、世界最大のお金などのパネル展示を行いました。会場入り口には、京都支店の広報マスコットである「円香ちゃん」と猫の「一之助」やお札の顔出しパネルを設置しました。来場者からは、「日本のお金の偽造防止技術がとても高度であることが分かって良かった」といった感想が聞かれました。

た。来場者には、職員がデザイン・作成したオリジナルの銀行券の裁断片入り菓を記念品としてプレゼントしました。

来場者には銀行券の裁断片入り菓をプレゼント



▼京都支店では、こうした地域とのつながりを大切に、今後も地域経済の発展に貢献していきます。

会場入り口では京都支店広報マスコットの円香ちゃんと一之助がお出迎え





from Brussels

## ベルギー釣り日誌

私のベルギーでの生活の一部を日誌風にご紹介します。

### 【5月某日／晴れのち雨のち曇り】

南部のワロン地方スモア渓谷でマス釣りをしました。釣り人が少ないせいか、腕が良いせいか、たくさん釣れました。ベルギーではニジマスよりブラウントラウト(注1)が主流のはずなのに、釣れるのはなぜかニジマスばかり。通りすがりのおじいさんに聞くと、近くにニジマスの養殖施設があり、時々放流しているとのこと。少なくとも腕が良いわけではなかったのか、と少しがっかりしました。

バター焼きにしたマスは、空気中の天然酵母を取り込んで醸すランビックビール(注2)によく合います。むしろビールの方が天然物。そういえば、ベルギーではもうじき総選挙。義務投票制を採用しているこの国では、国民の多くがいやでも応でも国の行く末に大きな関心を寄せています。



イヴォワール近郊にて。政治は滞っていても、川は流れ続けます。



ランビックビールは少し原始的な酸味が魅力です。

### 【6月某日／曇りのち晴れのち雨】

ここ最近忙しかった仕事が一段落。今度は同じワロン地方でもオルヴァル村でマス釣りをしました。今にも大物がかかりそうなポイントが山ほどあるのに、この日はアタリが全くありませんでした。やはり私は釣りが下手なのでしょう。

仕方がないので、近くの修道院で買ったトラピストビール(注3)を楽しみました。アルコール度数が高いためすぐに酔いましたが、その分飲む量は控えめにできて、アウトドアにぴったり。先日の総選挙では、文化や経済力が異なる北と南の分断が一層明らかになった、と盛んに報道されていました。サッカーであれば、北・南の別なく国民が結束できるので、サッカーの国際試合を頻繁にやったらいいのに……と後悔してしまいます。

### 【10月某日／雨のち曇りのち晴れ】

今日は、北部のフランダース地方ゲント市近郊でコイ釣りをしました。ほとんど座りっぱなしのため、地元のとておいしいウイスキーをじっくり飲みました。ベルギー人でも国産ウイスキーの存在を知る人は少ないので、積極的に周りのお客さんにお裾分け。「日本のウイスキーに比べたら大したことないって内心思ってるでしょ？」と勘繰られたように感じました。やはり欧州の小国で生き抜いてきた人たちは用心深い気がします。5月の総選挙の結果、組閣協議が難航して政治空白が続いていますが、それでもこの国の人たちは何とかやっていくのだと思います。

(国際金融情報センター、ブラッセル)

\*本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。

(注1) ブラウントラウト／ヨーロッパ原産のサケ科の淡水魚。

(注2) ランビックビール／ブラッセル近郊等でしか造られないベルギービール的一种。野生酵母を使い、強い酸味が特徴。

(注3) トラピストビール／カトリック修道会の一つトラピスト会の修道院で独自に造られるビール。



にちぎん